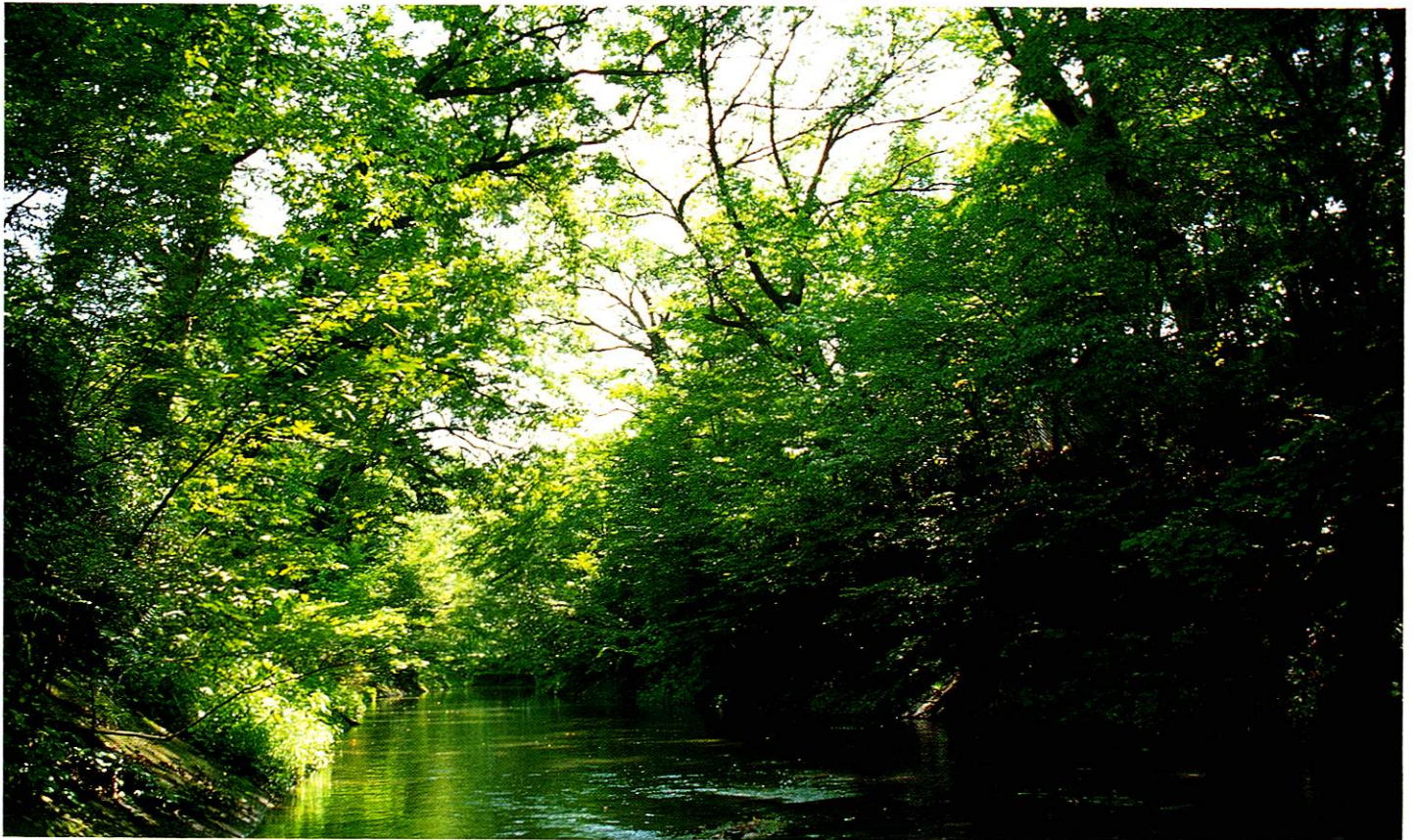


ときには玉川上水の自然林に 少年時代を訪ねて



いまは忙しくてめったに散歩もしませんが、それでもときどき出かけていく場所に玉川上水があります。武蔵野の自然林が昔と変らぬ姿で残っている市内でも貴重なところで、ここは新東京百景(新堀橋付近の玉川上水)にも選ばれています。

夏になるとほたるが舞い子供たちにとって絶好の遊び場でした。しかし、上水に入っちはいけないと厳しくいわれており、見張り人がよく巡回していました。この水が新宿の淀橋浄水場へ行くのだということは幼い頃から聞かされていたので、子供ながらにも一定のルールを守るといことはよく心得ていたと思います。

そんな「大切な場所。だったせいか、いまも玉川上水の自然林や川だけはみんなが愛し、汚す人が少ない。あらゆる場所がこのようになると素晴らしいことだと思います。

私は福生っ子で、家は農業をやりながらスポーツ店を経営していました。まだスポーツ店は都下に2軒しかない時代で、家に柔剣道の用具やテニスのラケット、シューズなどがあるというので、仲間たちからずい分うらやましがられたものです。

その頃私たちが使っていたグローブは布製で、何度もつぎを当ててボロボロになるまで使っていました。

福生市長 田村匡雄



それにしても戦後の福生の変わりようは大変なものでした。私は兵隊に3年いたので余計にそう感じたのかもかもしれませんが、仲間の多くが米軍基地などに働きに行き、農家も米軍人家族専用のハウスを作り生計をたてていました。

私は商店会、消防団などの仕事を手伝うようになり、とくに「七夕まつり」には若者も参加して材料を集め、手づくりで飾りつけたことが印象的です。あのときの団結力と創意工夫した熱意が現在の福生名物「七夕まつり」の成功につながっているのだと思います。

福生市は、他の市町に比べると土地面積は少なく、小ぢんまりまとまっています。

そのため、公共用地等の確保がむずかしく、思い切った区画整理や施設づくりが大変ですが、反面、住民生活に関わるきめ細かい施策が不公平なく実施できます。

これからの高齢化社会を考えると、住民福祉の充実や地域コミュニティ活動等が全市的にきめ細かく実施できるだろうと思います。

市の施策では、懸案だった施設も殆ど整備されました。都市環境づくりで最大事業といわれる公共下水道事業も他市町に比べるとかなり早く手がけ、完成へあと一歩となっています。

下水道が完備すると市内の河川はもっと美しくなり生活環境も一段と快適になってきますが、多摩川の一部地区は汚染がひどく、その原因となる家庭雑排水等の流入では周辺市町の協力が必要です。これからは本市を含める広域市町の総合的な地域開発、自然環境の保全が必要です。

また、今後の施策では、福生駅西口周辺の再開発事業、住民の健康づくりの推進、社会福祉や教育文化の充実などに一層力を入れていきたいと思っています。

「豊かで活力ある福生。をめざすためには、市民の声をきき、またあらゆる機会に一人でも多く参加、協力してもらいながら、市民・行政が一体になった都市づくりが必要だ」と感じております。

本誌はその一助として発行いたしました。戦後38年、市の歩みにもふと心をとめ、さらに新しい都市づくりにご協力、ご支援いただければ幸いです。

多摩川 ——記憶のなかの鮮やかな故郷の風景——



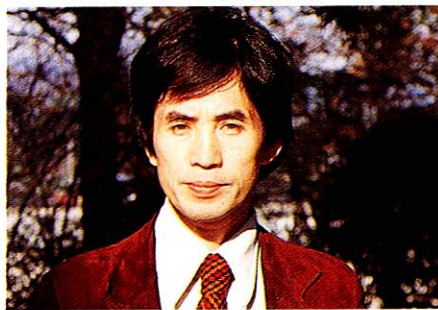
福生は多摩川の中流というのですか、上流へ行くとまだ水が冷たく、下流になると流れがゆるやかなところですね。いつだったか、多摩川で泳いだ少年時代を突然思い出しました。とくに渡船場で水遊びした印象が大変強く、私の記憶のなかの風景、あるいは故郷の光景となっています。

私たちが泳いだ場所は3つあり、1つは多摩橋の下、1つは現在の永田橋の下、渡船場といわれた場所でした。ここには仮橋があり、水が岸をえぐるような深い淵がありました。子供にとってその淵は相当深いところで、場合によってはおぼれて死ぬ危険性もあるのですが、水をかけ合ったり追っかけっこしたりしてスリルを味わったものです。

疎開先の和歌山から福生へきて終戦の年に福生第一小学校へ入った私は、こんな命がけの水遊びを通して土地っ子たちになじもうとしていたのかもしれませんが。

多摩川はキャサリン台風かアイオン台風がきたとき、多摩橋も崩れるほど大水がでて、川幅いっぱいになる濁流を眼前にして子供たちは茫然と立っていました。

詩人 吉増剛造さん



た。そのとき私は岸から少し川に入って泳いでみたのです。いつもの癖で水中で眼を開くと、その水中でみたものは異様な光景でした。泥水のなかですから黄色い砂粒の他には、見えるものとしてありませんが、何もみえないという驚きと眼の痛みが痛烈に私の印象に残り、それがもう1つの多摩川の姿として心に残っています。

いつものおだやかな川に戻っても、小河内ダムができてからは川の流れがどこか違ってきて、渡船場の淵あたりのところに川の眼みたいなものがあり、それが不思議な生き物のように思えるのです。

多摩川の対岸には草花、十二天、山の

神などがあり、秋川段丘は私たちにとって別世界のように見えました。多摩川の南壁から幾つもの川が流れおちて多摩川へ注ぐということを想うと、鮮やかなかたちで福生の地理が浮かんできます。

いまもときどき福生へ帰り、牛浜駅の橋上から奥多摩の山々を眺めると、東京湾からの高低の具合とでもいうのでしょうか、地理感覚と福生の位置が頭に浮かびあがってくるのです。青梅線から中央線へ、そして東京湾へと鉄道の線路がゆるやかな傾斜ですっと下っていることを子供の頃に考えたものでした。

私は福生という地名や加美、志茂という土地の名前が好きで、加美、志茂は多摩川の上、下の美称なのでしょう。福生の地名の由来が「麻」であるときくと、昔人々が多摩川で麻布を洗いさらしていた様子が目に浮かびます。

私は「出身地は？」と問われると「フッサ」と答え「幸福の福と、生れるです」といいます。

このフッサには不思議な響きがあり、古代からの詩的な糸のつながりが感じられるのです。

世界へ羽ばたく子らの出発の場に 福生市図書館と「日の出金色」陶壁画



福生の図書館は緑の風がいつも感じられるような公園の中にあるモダンな建物で、ここへくると心が和みます。

正面玄関を入ると右手に郷土資料室、左手に図書館があり、その正面ロビーの壁いっぱいには私の力作「日の出金色」の陶壁画があり、大変光栄に思っています。

とくに福生の子供たちにとって、ここが社会へ、世界へと羽ばたいていく出会いと出発の場となってくれればと願っています。

そういえば、福生市が図書館をつくるので、その正面壁画をつくってくれないかとたのまれたときの市からの依頼の言葉が、いまでも強烈に印象に残っています。

「日本は小さい国です。これからは国際的な視野を持った若者が必要で、図書館は本を通じて世界を知り、人と人が出会う場所です。——あとはおまかせします」と。

市から依頼されたのが昭和54年3月。作品の完成は12月で、その間、家族はもちろん、仲間たちにも手伝ってもらっての凄絶な10ヵ月間でした。

私は器用ではありませんので、普段の作品づくりはすべてストップし、新たにこの大作のために滋賀県の信楽から土を

陶芸家 岡野法世さん



トラックいっぱい取り寄せ、窯熱源に使う松の木を岡山県の備前へ手配。終ってみたら自宅にあった粘土もすべて使い果すという具合でした。

壁画の太陽のイメージができると原寸大のスケッチをつくり、それに合せて練った土をブロックごとにならべていきます。作業場からとび出すほどの大きな木枠をつくり、その上にレールを敷いてトロッコが動くようにしました。土をならべると、皆に手伝ってもらい足踏み作業が数日間。足がマヒして動かないほどになりました。9月いっぱいまで原形ができあがり10月から窯入れ作業です。

私の陶芸の特徴は、無釉（うわぐすりをかけない）で松で焼き焼いて自然の色を生かす方法です。同じ土でも窯詰め

位置、温度によって色や艶が違ってきます。土の持つ素朴な質感と微妙な色合い、肌ざわりを大切にしたい。そのため長年あらゆるところから土を持ってきて、それを火の状況を変えたりしながら焼いてデータに残してきました。

「日の出金色」の赤い炎の部分は、わらを敷いてうら返してならべて焼いたものなんです。

自宅の登窯に火入れし松の木を燃やしつつつけて5日の朝やっと火止めしました。1300度までもっていくために、家のまわりに壁のように積み上げておいた松の焚木もきれいに消えていきました。

その後2度窯を焼き、図書館に搬入したのが11月26日。体は地底に沈むかと思うほど疲れ果てていましたが、イメージ通りに焼き上がり、壁面が完成したときの嬉しさは格別でした。

福生の図書館は蔵書の数も多く、コンピュータなど使って手ばやく必要な情報を提供するなど、利用者からも好評ですね。これからは子供たちばかりでなく大人も老人もいろいろ学んで豊かな知識を得ていくことが必要。こういう施設をもっと活用していきたいものだと思います。

福生七夕まつりは 多摩地区最大の夏祭りに



私はお祭りが大好き。ほたる祭り、基地のカーニバル、それから七夕まつり、毎年必ず楽しみにして出かけます。とくに七夕まつりは4日間とも欠かさず夕方から友だちと出かけるんです。そんな祭り好きな福生っ子の私が今年の「ミス七夕」に選ばれるなんて、とても光栄ですね。

(小田直美さんは、近所の人の推薦で応募し、二十数名の中から選ばれた幸運の「織姫さま」です。この行事は昭和50年の第25回の七夕まつりからハイライト行事としてはじまり、今年が9回目です。)

選ばれたときは嬉しいというより驚いてしまって。自転車とか洗濯機などのたくさんの賞品や私のことが書かれた新聞記事を見たとき、はじめて実感として感動が湧いてきました。

また、最終日のミス七夕パレードでは、ミス七夕の3人とミス東京、ミス西多摩の方々とおオープンカーでパレードできたのは、とても良い思い出になりました。

いままでは一市民として祭りを楽しんできましたが、今年は主催者側の1人とし

第9回「ミス七夕」 小田直美さん



てお手伝いでき、裏方さんたちのご苦労もわかり、とても良い勉強になりました。また、ミス福生としてミス東京大会に出場でき、青春の良い記念になりました。

私は今年保母さんとしてスタートしたばかりの社会人1年生ですが、これからも子供たちの世話を通じて地域の文化行事等にも参加していくつもりです。

ところで「仙台七夕祭り」と肩を並べるほどの人気を持つ「福生七夕まつり」、その第1回目は昭和26年中央商栄会が中

元売出しのデモンストレーションとしてはじめたそうで、当時町役場職員だった佐藤三郎さんが戦後仙台に住んでいて、焼け野原と化した仙台市内で、市民が七夕祭りにあらゆる手だてを尽して飾りつけをする姿に感動し、帰郷後商店主に提案したのがきっかけとのこと。

「福生でもぜひ七夕を」と、店主の方方は一睡もせず竹に色とりどりの短冊やモールを飾りつけました。この手作りの七夕まつりが大変人気を呼び、翌年からは町全体の商店街が参加するようになり、夏の一大行事になっていきました。

やがて、商店街の振興行事としてだけでなく、市民文化行事や各地の郷土芸能も競って出場する多摩地区を代表する夏祭りになり、4日間に延べ60万人がくり出すそうです。

街をうめる人、人、人の波の中には、九州、北海道からやってくる人々もいます。そしていまでは、福生の知名度を高め、多摩地区住民が心から待ち望む真夏のイベントになっています。

木を通して 自然との対話を試みる



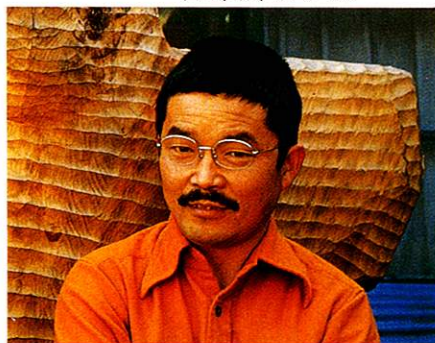
私は多摩川沿いにある柳山公園が好きです。あそこには大きなけやきの樹が沢山あり、長い年月を風雪に耐えてきた彼らと話をするのが好きです。

私の彫刻の場合は寄せ木をせず、一本の木をそのまま使います。注文しておいた丸木が届くと、それを1年位仕事場にねかせておいて、じっと見ているうちに彫りたいもののイメージがふくらんできます。「こっちにも何か求めているものがある、お前にも何かあるだろう」と木に問うわけです。木の生い立ち、何百年という歴史、木をとりまく自然環境などをあれこれと想像し“無限の時間”の中に自分をおく。

彫るときは、木の性質をそのまま取りこみ、線条痕という私独自の方法（ノミの跡目をそのまま生かして木の質感を出す）で仕上げます。

今度、福生駅前広場用につくった作品は、木彫りしたものを鑄造したブロンズ像で、完成までに1年半かかりました。原型の木彫の作品をこの間個展に出品し

彫刻家 合津真治さん



ましたら、毎日新聞が「一对の母子像。着物の袖を広げて子供を包みかかえる母性の強さ」と書いていましたが、私としてはいちいち説明するのは得意ではなく、あえてタイトルをつけるなら「星」、それも象形文字の「星」にしたいと思っています。

5年前に「恒河」と題する作品をつくり、それは「数えきれぬ無限の、無数の“砂”」をイメージしたもので、その後“宇宙の風、という野外個展を試みたりしました。

今度の作品では自然との対話をふと考えてみる、そんなきっかけになればうれしく思います。

福生の、いわゆる“ハウス”に住んで10年たちましたが、この周辺にはまだわずかながら畑があり、ときには下肥のなつかしい匂いもします。犬や猫も多い、子供たちも垣根のない庭先で自由に遊んでいます。雨もりには閉口しますが、あまり整備されないところが魅力ですね。

我が家では妻が中心になり、小さな畑を借りて何でもつくっています。なるべくお金をかけずに自然食をということではじめたわけですが、健康にもいいですね。

そういえば、福生はとても空気がきれい。多摩川という大きな川と木々の緑が多いせいか、いつも風が流れていて、空気が澄んでいるように思います。風は秩父の方から流れてきて、決して川崎の工場の方からは吹いてこない。整備も必要ですが、自然そのものの魅力を大切に残していきたいものだと思います。

初夏を彩る青白い光の幻想。 「ほたる祭り」、福生の名物に——



私が30年前福生へ引越してきたとき玉川上水で見たほたるのこと、いまでも鮮やかに思い出します。青白い光が乱舞するさまは幻想の世界そのものでした。私の住む熊川あたりは昔からほたるの成育に適した川や水があり、名所だったんですね。とくにここは光の尾が長くて明るく輝く源氏ボタルの本場です。

しかし次第に開発がすすみ、さらに玉川上水が整備のため川をせき止めたことがあり、ほたるはすっかり減ってしまいました。そのころ渡辺継次郎さん(故人)がほたるの研究をやっていたので、私も町会の役員をやっていたので、みんなで何とか協力していこうと「ほたる研究会」をつくったんです。そして昭和40年から熊牛町会として「ほたる祭り」を行なうようになりました。

もう18年目。いまでは、この祭りも全市のものになり、各地から大勢の見学者がみえ、夜店や民謡大会も催され大変な賑わいです。なかにはほたるを觀賞するの

「ほたる研究会」会長 古屋貞雄さん



なく捕えるためにやってくる人もいますが、困ったものです。1週間位は飛び交う姿が見られます。

いまではほたるが産卵して幼虫までになる場所やエサが少なくなりましたので、雌はまた捕獲して卵から私たちが人工的に飼育します。普通は1年間に5眠位して脱皮をくり返し成虫になりますが、夏にタイミングが合わないといと2年後に成虫するものもいます。

幸い私の家にはいい井戸水が湧いてい

ますので家の中に小川のせせらぎの状態をつくりそこで飼育しているのですが、一番大変なのはエサにするカワニナ(まき貝の一種)の入手です。このあたりには少なくなってしまいましたので、いろいろの人をお願いして埼玉県の奥まで求めにいきます。いま「ほたる研究会」の会員は28名ですが、話をきいてエサを届けてくれる人もいるようになり、また町会の人たちやボランティアの人たちも協力して公園や池の清掃活動をやってくれるようになりました。

水温は18~22度、まき貝などをつぶして与えながら1年間手塩にかけて育てたほたるが無事成長し、夏の夜空へ飛び立つ瞬間。何ともいえませんねえ。

最近小平市の方でほたるをよく見かけるそうですから、福生で放ったほたるでしょう。自然の中で再びあの青白い光の幻想が見られるようになったら素晴らしいと思います。

桜吹雪のトンネル、すすき一面の晩秋…… 多摩川を毎日マラソン!



主婦 土谷節子さん



私の家（日本住宅公団福生団地）の玄関を出ると、そこはもう多摩川の土手。以前からあまりからだが丈夫ではなかったので、子供が生まれたのを機会にジョギングをはじめました。

はじめた頃は多摩川堤のサイクリングロード1600mを往復していたんですが、いまは睦橋から隣の秋川市までの5kmコースを、雨の日以外毎日必ず走るようにしています。

このコースは車が少ない道路や自然遊歩道なので、練習にはとてもいいんです。それに何ととっても美しい自然が四季折折楽しめることです。

とくに春は土手沿いの桜並木が素晴らしく、桜吹雪のトンネルの中を走るときは最高の気分です。秋は遠くに紅葉の山々、そして多摩川の河原は一面のすすきで、秋のやわらかい陽ざしを浴びてとてもファンタジックです。

こんなステキな自然といい空気のせいか、春から秋まではジョギングする人がとくに多く、今日もお喋りしながら楽しそうに走っている先輩の方を見かけました。私の子供も剣道を習いはじめたので、朝おきるとすぐ土手へ走っていき素振りをやっています。

ジョギングをはじめた頃は子供が小さかったので、朝4時起きで走ったものですが、いまは幼稚園へ行っている時間を利用してやっています。

いくつかの大きなマラソン大会にも出ていますが、つい最近、東京都の友好都市になっている北京のマラソン大会に、国内女子選手6人のなかに選ばれて行ってきました。福生市では男性の部で杉本宏二さんも出場しています。アマチュアのマラソン大会と聞いていたんですが、北京大学の学生が圧倒的に多く、しかも5人に1人のコーチ付きで特訓を受けてきた強豪選手たちでした。それでも女子の部972人出場中、20位に入ることができ、まあまあと思っています。あの天安門前

の道を2車線交通止めして走ったんですが、道路、風景など、日本とスケールの大きさが違うんで改めてびっくりしました。

いま、次にめざしているのは青梅マラソンです。各地の大会へもっと出場したいとは思いますが、家庭がありますからそう好き勝手できませんね。

でも中国へ行っていたあいだも、団地の知り合いの方が、幼稚園の送迎をしてくれるなど、いろいろ助けてもらっています。

私の方も何か役立つことがしたいと思いいまからの不自由な方のために点訳や手話のサークルに入り勉強しています。耳の不自由な方でマラソンなどやっている人もかなりいますので、そういう人に役立ちたいですね。

あとはお料理手づくりの会が月2回ほど。だから、いつも毎日何だかんだと忙しく、夜はバタンキューで寝てしまいます。でもマラソンをはじめてから、かえって市の各種活動にも参加するようになったし、家事も時間を上手につくってすばやくきちんとやるようになりました。充実した毎日をからだを通して感じとっている、といったところでしょうか。

「ふっさっ子」いま、昔 自然の中で健やかに育って欲しい。



「ふっさっ子」編者 山崎茂男さん



声を聞き親たちも意見交換をするように、『ふっさっ子』という新聞を発行し、もう410号になりました。

授業のあい間に、広告の紙の裏など利用して感想文など書かせてきましたが、子供たちのこうした声は、学校では言いにくいナマの声が出て面白いんです（新聞社がこの新聞をみて興味を示し、これが全5冊の単行本にまとめられている）。いまこれらのものを改めてみると、世の中の動きの早さ、時代の移り変りに驚かされます。子供たちの生活、考え方がその時代を反映するのは当たり前です。

最近、テレビの朝ドラマとして人気のある『おしん』をどう思うかと子供たちに聞いたんですが、大人たちが感動してみている割には現代っ子たちは白けています。

夏休みの再放送のときは、テレビの横でおじいちゃんやお母さんたちが、色々解説するのうさくて困ったなどという感想もいくつかありました。話としては苦勞した少女に同情もするけれど、モノが豊かな時代の子供たちに、大人たちがたどってきた苦勞、努力を自分のものとして感じることはむずかしいと思います。

せめて子供時代ぐらひは、自然の中で泥んこになって遊んだり、スポーツなどして、からだを通じて生きることの原点みたいなものをつかんでいってほしいものです。

市が緑地保全に力を入れているので福生市には、まだ自然がたくさん残っています。

多摩川では、四季折々の鳥たちが見られ、玉川上水にはホテルが舞い、雑木林にはわずかですが、まだカブト虫やクワガタがいて、都会の子供たちがあじわうことのできない季節の移り変りが日常生活の中で見ることができます。この恵まれた環境は大切にしたいですね。そしてこの素晴らしい街、福生で育った子供たち「福生っ子」がここをふるさととして誇れるよう、市民のひとりとして、多少なりとも役に立ちたいと思っています。

子供たちのふるさとといえば、我々の頃は、多摩川と柳山公園、そして、玉川上水沿いの雑木林が、一番の“冒険ランド”でした。雑木林の中には栗の木や榎の木があり、山栗やタラの芽を食べたものです。また、そこは、野鳥やこん虫たちの宝庫です。毎日に変化にとんでいて、遊ぶことにあきるなどということはありませんでした。そして、その遊びの中から色々な知識と知恵を学んだものです。

昔の子供に比べると、いまの子供たちは本当に忙しいですね。私は戦後間もなく青年団にたのまれてソロバンを教えたのがきっかけで、いまも珠算学校を経営していますが、ここにくる子供たちをみても昔と違い生活も変って多忙ですね。だから、野山へ出かけて遊ぶ時間もないし、またそういうところへ行くと親たちがケガや事故を心配して止めさせてしまいます。

そのせいか最近の子供たちをみていると、理解心もあり、いうこともよくきくいわゆる優等生が多いのですが、全体に弱々しく、子供らしい八方破れなタイプがいません。ガキ大将がおらず、従ってケンカしたり、地域ぐるみでみんなで遊ぶということがありません。

私のところでは毎月1回、子供たちの